

しんらん講座に 参加して みんなの声



* 差別

▼ こういう世の中に生きてみたいと願い、物事を見ていくことが大事だ。個人の差別心だけでなく、社会のあり方が差別の心を生み出していく。

▼ お聖教の中の差別表現と思われるところをどう扱うのか。

* ハンセン病

▼ 隔離政策がつい最近まで行われていたことに心が痛む。これは私達一人ひとりの責任。

▼ ひどが患者とその家

族の尊厳を奪い取ってきた。それは自己中心の私が差別を肯定しているから。そんな私がいかにして念仏往生に身を委ねる私に転換されるのか、聖典にかえり講義を受けたい。

▼ 二〇〇一年の「判決」以前、大谷派はどのような対応だったのか。

* 女人成仏

▼ お聖教の中に、女人は罪深き者という記述があるが、何が罪深いかわからない。

* 無仏・濁

▼ 「無仏」の時代は仏法が届かない時代であると実感しています。今まさに、仏法が届かない為に煩惱や自己中心的な見方を依拠にする事態になっていると思います。

▼ 無仏の世界が濁を濁と見ない世界だと感じました。劫濁Ⅱ時代の濁りⅡ無仏となると、子や孫に仏法は届かないように思います。

▼ 無仏の時代を生きる私たちは、何を大切にしようとするべきか、日々の過ごし方などを心に響く言葉で教えてください。

▼ 濁りの自覚から私が生きていること自体の罪の意識ということはあるが、言葉で理解できていなくても、心の底から懺悔することはできません。

▼ 本願に背いている凡夫（無仏の世に生きる罪）であることは、よく理解できました。現代の風潮がそれを示しています。しかしご和讃をよく読むと、私達凡夫を導かれる言葉

で溢れています。私たちは宗祖のお導きを信じて、心から名号を称えるしかないと感じております。

* 感想

▼ 難しかったです。劫濁無仏の時代に、私たちは何を拠り所にして、どう生きればいいのか。指月の譬えのように、いのちの濁りのなかで私たちは何に向き合おうとしているのか。テーマが大きくて、四回の講座では十分に理解しつくせません。改めて回数を増やして、ゆったりと考える機会を作りたいと思います。



委員と
編集の
とこ
ひ

毎日、「新聞」には様々の出来事が掲載されています。仏様は、これらの事をどんな風に見ておられるのでしょうか。「無仏の時代」において、どちらの方向に向いて生きていけばいいのか迷っている私たちは、今の「濁世」を人としてどこを向いて自らの人生を歩んでいけばいいのでしょうか。「赤表紙」にたずねながら、聴聞してまいります。ありがとうございます。(K)

次回開催予定
6月15日(火)
14時
会場 長浜別院

しんらん講座だより

-SHINRAN LECTURE NEWS-

VOL.3

発行所：長浜・五村別院
長浜市元浜町32-9
代表者 宮戸 弘
編集：両別院教化推進委員会
お問い合わせ：
長浜：0749(62)0054
五村：0749(73)3133
FAX：0749(62)0754
MAIL：shinran.lect@gmail.com



講師・訓覇浩氏

第二講要約 ①前回の講座より

前回は、亡き人と出会うという事についてお話しさせていた事で、印象に残った言葉に「遠慶宿縁」、「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪へ」などを多くの方がアンケートに記してくださいました。また、私が亡くなった方を「煩惱の火を消して

くれた存在」と話した事について、もう少し説明してほしいという質問もありました。他に「共命鳥」の譬えについても、沢山の方が意にとめてくださったようです。そのあたりからお話したいと思います。

まず「遠慶宿縁」ですが、これは本来、仏法に出会った慶びを語られる言葉です。この言葉がたまたま私にとっては父親との縁をいただく言葉として実感したという以外にお伝えのしようがありません。ただ一言付け加えさせていただくなら、少なくともそう感じる事ができたのは、父親が

「煩惱の火を消してくれた」という事が間違いなくあると思っっているという事です。つまり、互いに煩惱の火を燃やし合う存在である限り、いくらその縁が「元々慶ぶべき宿縁」であったとしても、それをそう受け止める事はできません。煩惱の火が邪魔をし合うからです。つまり人間と人間の関係である以上、そう受け止める事はできないと思います。しかし一方が菩薩となってくださった事によって、その手がかりが、煩惱の身である私の上に与えられる。私の中からは絶対に出てこない手がかりです。だからこそそれを「煩惱の火を消



次に「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪へ」ですが、これは前回の話の中でも触れたように、道綽禪師は「後に生まれん者は」のところに「後に去かん者は」と記されています。この言葉から、これは「浄土に還った人」といっていいかと思えます。ただ親鸞聖人がその

お言葉を『教行信証』に「後に生まれん者は」という言葉で引用された時、さらにどういう事を読み取っていったのかという事を、改めて受け止めなければならぬと思っております。

そして「共命鳥の譬え」ですが、最近本山から出版された本にも紹介されています。それらを読んでも、私がいただいた意味はオーソドックスではないという気もしております。しかし、この事も私はいったいどう思ったかという他ないので、その受け止めから、ご質問の一つにお答えします。前号の「たより」にも掲載されておりますが、「相反していたものが、なぜ浄土では響きあえるのか」という事です。私はそれを一言でいうなら「それが浄土のはたらきである」と言わせていただきます。思います。そ

して同時に「相反さす事が穢土のはたらきである」という事にもなるのだと思います。そのように言うことで、自分達の煩惱がなせる事も「穢土のせいにするのか」「無責任ではないか」と感じられるかもしれない。しかし一度そう言い切らないと、本当の私たちの責任という事が実ははつきりしてこないし、曖昧になる。そして、なぜ救済が「願生浄土」という言葉で表されるのか、という事も明確にならないと思います。今回入れてあと二回しかありませんが、そのあたり少しでも自分の言葉で表現していけたらと思います。

②五濁の相関と内実

それでは、今回の内容に入っていくしたいと思います。前回の資料で、善導大師の『観經四帖疎』『序分義』にある五濁の領解をご紹介します。

たしました。改めてたずねさせていただきます。

劫濁と言ふは、然るに劫は實に是濁に非ず、劫滅する時に當りて、諸惡加増するなり。衆生濁と言ふは、劫若し初めて成るときは、衆生純善なるも、劫若し未なる時は、衆生の十惡彌々盛なり。見濁と言ふは、自身の衆惡をば總じて變じて善と爲し、他の上の非無きをば見て是ならずと爲す。煩惱濁と言ふは、當今劫末の衆生、惡性にして親み難し。隨ひて六根に對するに、貪・瞋・競ひ起るなり。命濁と言ふは、前の見・惱の二濁に由てか、多く殺害を行じて、慈みて恩養すること無し。既に斷命の苦因を行じ、長年の果を受けむと欲ふも、何に由てか得べき。然も濁は體是善に非ず。今略して五濁の義を指し竟んぬ。

これは、『真宗聖教

全書』の「序分義」の当該箇所（四九六頁）の書き下しなのですが、それぞれの濁の内実を本質的に教えてくださっていると思います。また五濁が並列してあるのではなく、展開の中にある事も読み取る事ができます。ただ、最後の「命濁」の「慈みて恩養すること無し」の部分、漢文のままなら「無慈恩養」ですが、普通に読めば、「慈みて恩養すること無し」となるところを、親鸞聖人は敢えて「恩養に慈なし」（『親鸞聖人全集』第九卷 加点篇）と読まれております。この事を大変大事な視点としてお示しくださっているのが、廣瀨 果先生です。先生は、前の読みだと動詞として使われている「恩養」という言葉を、親鸞聖人は独立させて、自分を養い、慈しんでくれる、そういう力、はたらきと読

み変えられている、と指摘されています。そして、この恩養というはたらきに慈が無い、というのが「命濁」の本質なのだという事です。

私はこのご指摘は、命濁というものの内実を確かめる時、大変大切なものであると思います。「慈みて恩養すること無し」でも意味は通るのかもしれませんが。しかし、それは「恩養」を動詞とする事で「慈みて」も、恩養を強調する言葉にとどまり、命を粗末にする、ひいては殺人事件が増えるというような、人間の行為、悪行の話になってしまふのではないのでしょうか。そうなる、それに続く「斷命の苦因を行じ」という言葉も、厳しい言葉ですが、人間の行為の延長にある言葉になってしまいます。それが「恩養に慈なし」と読まれたときは、命濁という事

は、恩養というものが人間の上にはたらかなくなる、という事になると思います。ちょっと極端に言う、人間の存在が恩養という力がはたらかないところにおかれてしまう。その結果が「斷命の苦因を行じ」という事になるのだ。廣瀨先生は恩養という事を「存在している事実のなかに見出した生命の連帯」と押さえられます。いのちの意味、つまり生きるこの意味を見失うという事です。私はそこに、見濁、煩惱濁、衆生濁から命濁への、濁の大きな質の転換があるのでないかと受け止めています。

この講座でお話するにあたって、改めて特に廣瀨先生、宮城 顛先生の講述を読み直し、皆さまに紹介させていただきます。ありますが、宮城先生は、親鸞聖人が「正信偈」の「五濁惡時群生海」

という言葉に込められた意味を「本願に照らしての自分の在り方や、ともに生きているこの世の在り方に対する深い悲嘆」といって、それを仏の仰せとして聞く事を「まめに自らを」「五濁惡時群生海」の身として深信する」という言葉で押さえてくださっています。そこに紛れもない、私自身の身の事実への領きが語られ、また深信という言葉に、五濁という事が人間の反省ではなく、仏のまなざしによって見出された人間の相であることが教えられているのだと思います。

③劫濁の本質 無仏の時

それでは今回の最後に、もう一度「劫濁」というものの本質を尋ねてみたいと思います。

これまで「劫濁」というものを「時代、社会の濁り」

と表現してきましたが、皆さまもその言葉だけでは何か漠然としたものをお感じになってきたのではないかと思います。先ほどお示した「劫滅する時に當りて、諸惡加増するなり」という善導大師のお言葉でも、今一つのような濁りなのかピンとこないという事があるのではないのでしょうか。劫濁という濁りが生み出すものとしての、見濁、煩惱濁、衆生濁、そして命濁というものがあるならば、私はこの濁りの時代を、「無仏の時代」と押さえていいのではないかと思います。「正像末和讃」の第一首は、

釈迦如来かくれましまして
二千余年になりたまふ
正像の二時はおわりにき
如来の遺弟悲泣せよ

というご和讃ですが、この時代を「釈迦如来かくれま

しました」時代と受け止めておられます。

また今講座のテーマでもあります、「五濁の時機いたりては」というお言葉がある次のご和讃では、

五濁の時機いたりては
道俗ともにあらそいて
念仏信ずるひとをみて
疑謗破滅さかりなり

「疑謗破滅さかりなり」です。から、教えが人間の上にはたらかなくなる時機という事だと思えます。

このように、濁世であるという「根拠」が、教えが人間の上にはたらく、はたらかなくなる、ということころにおかれているのだと思います。倫理や道徳ではないという事です。その事は、先ほど確認した、命濁の内実というところからも押さえられるのではないかと思

います。

また少し文脈の違うところからの言葉になりますが、

無仏世の衆生を、仏、これを重罪としたまえり、見仏の善根を種えざる人なり、と。
〔『教行信証』「化身土巻」〕

という、親鸞聖人は、龍樹菩薩の『大智度論』から大変厳しい言葉を引かれています。人間の行為が重罪なのではなく、教えがはたらかないという存在そのものが重罪であるという事です。私は、ここからも時代の濁りというものの内実を読み取れるような気がしております。

そしてこの無仏の時代の衆生というものを、善導大師は、「帰依処」を失ったもの、と押さえられています。そうすると、見濁、煩惱濁、衆生濁という濁りは、「帰依

処」を失った人間が呈する相、さらにいうと、それを自らの依り処としなければ生きていけない相と言う事もできるのではないのでしょうか。そこに、濁を濁として自覚させないという、顛倒の在り方が出てくるのではないかと思います。

では、そのような衆生である私たちにとって、仏との接点はどこにあるのか。実はその接点こそが、無仏の世を生きる衆生である、という事実そのものなのだと思えます。その事実がそのまま、本願が私の上にはたらく必然性という事になってくるのではないのでしょうか。そのあたり、次回今年度最終回ですが「章提希の救い」というところに向き合いながら、確かめていく事ができればと思います。

